

「今、私の晴雨計は！^②」

「シルクロード・河西回廊の旅考」2

平山征夫

前回は河西回廊の旅の話が、得意の横道にそれて縄文遺跡の話になってしまった。反省しながらシルクロードの旅の続きを書こう。

「河西」と言うのは蘭州を流れる黄河の西を指し、長安を出発して蘭州に至った旅人はここで黄河を渡らなくてはならなかったそうだ。回廊としては蘭州からタクラマカン砂漠の入り口玉門関、陽関までの約一、〇〇〇kmで、祁連山脈とゴビ砂漠に挟まれた幅四〇〜一〇〇kmの帯状の地域で、正に回廊である。蘭州から武威、張掖、酒泉そして敦煌と西に向かってオアシ

ス都市が連なっているのだ。この中原と西域を結ぶシルクロードを通じて仏教などのほか沢山の文物が伝来、往来したかと思うと悠久の歴史を感じざるを得ない。

その中でも、武威の西夏博物館で見つめた謎の民族を知る手掛かりとしての西夏文字は興味深かった。特にエジプトのロセッタ石の様に表西夏文字、裏漢文字という異なる文字の記載がある石碑は、西夏文字解読の手掛かりになるものでロマンを掻き立てられる。その日泊まった武威駅前のホテルでは駅前での「広場踊り」の賑わいが音楽と共にいつまでも聞こえていた。中国では今この「広場踊り」なるものが全国的にも大ブームなのだ。以前よく見られた朝の太極拳はすっかりとって替わられていた。ただ、場所取

り争いや騒音苦情など問題もあるようだだが、健康目的に多くの人（といってもいわゆるおばさんが主体だが……）に好まれている。

張掖の大仏寺では大きな涅槃像を見たが、かつてマルコポーロもこの像を見ていたと思うと時間というものが不思議に思われた。この後訪れた「七彩山」は思いのほかの迫力で迫ってきた。この山の中に埋もれていた丹霞地形は、二〇〇二年発見され、道路や木橋建設など観光施設としてのインフラ整備が進み、二〇〇九年から一般公開されたものだ。虹色に霞がかかったような独特の風景は広大で迫力満点だった。こんな観光地が新たに発見されるところは「中国だなあ」と思った。超お薦めの観光ポイントだ。この後訪れた「嘉峪関」も明の時代に建

設された万里の長城の最西に位置する城で、最もよく残っていると云われるだけに、当時を偲ばせてくれた。ここから5kmで長城は終わるが、その先には白い頂きの祁連山脈が遠く望まれた。シルクロードを歩き来した旅人もここで長城と別れいよいよ西域に乗り出す覚悟を白い頂きを見ながら固めたのだろうか。

この後、この旅最大のドラマが展開した。敦煌に行く途中にある唐代壁画の逸品が多く残る大石窟「榆林窟」を訪れるというのが、このツアーの売りになっていた。莫高窟、西千洞と並んで、「敦煌三大石窟」のひとつであるが、観光向けの開発は遅れ、漸く近年道路が整備されバスが行けるようになった。ただ、その日は道路工事があって迂回しなくてはならないのだが、その

迂回路が果たしてバスが通れるか行
って見なくてはわからないという。行
ってみると果たしてその迂回路はか
なりの悪路で、小さなこぶのような山
を越えながら小一時間走ったが、二
三度跳ね上がった腹を打ったところ
で止まってしまった。運転手はこれ以
上無理という。諦めて引き返すのかと
思っていると、現地ガイドのKさんは
ヒッチハイクを始めた。来る車でも止
めて交渉している。そのうち、二台か
ら了解が取れたので、「前の方から順
番に乗ってください」という。一番後
部にいた私が降りてゆくと、乗用車と
バンタイプの二台に皆が乗っている。
バンでは一人でも多く乗れるように
と後ろの狭い荷台の荷物まで降ろし、
助手席にいた人が荷物番として降り
ている。聞くとここからまだ一時間以

上かかるという。「こんな狭い荷台で
大丈夫か」と言っているうちに、車は
いなくなった。取り残されたのは運転
手と荷物番、それに私以下四人の旅行
者だが、ガイドも添乗員もいなくなっ
た私たちは、顔を見合わせて「後どう
なるか聞いたか」と互いに確認するも
誰も何も聞いていない。自分たちでヒ
ッチハイクして来いというのかと思
ったが、車はなかなか来ないし言葉が
通じない。運転手はノンビリ煙草を吸
っている。こんな荒野に放り出されど
うなるのか不安に思っていると四十
五分くらい過ぎた頃一台の車が止ま
った。「乗れ」という合図だ。何が何だ
かわからないまま乗ると走り出した。
車の中では言葉が通じないから四人
は不安ながら思わぬドラマの展開で
やや興奮気味、「奴隷に売られるので

はないか」から始まって「こんな年寄
りは売られないだろう」「それにして
もこの旅行会社は変わっているよ。募
集の際アドベンチャー付きと書くべ
きだ」など異様に盛り上がった。そう
こうしているうち榆林窟に着いたが、
駐車場は空で一台もない。しかも入
場は四時までとなっているのにもう
五時だ。そこに二台の車が来た。「あん
なに早く出たのに?」と思って聴くと、
結婚式帰りの車はあの後町に寄って
人を降ろして、ガソリンを入れていた
という。我々の乗った車は病院に母親
を送ってから向かうということだっ
たそう。まあ、なんとか皆揃ってやれ
やれと言うところで、ガイドのKさん
の友人と言う学芸主任のTさんが表
れて「ようこそ。今からご案内しまし
よう」と言う。「入場時間がすぎている

けれど?」と聴くと「時間は気にされ
なくてよいです」と言う。ほかに誰も
いないこの石窟をそれから一時間か
けて見物できたのは本当にラッキー
だった。
榆林窟は石窟といっても莫高窟の
様な山肌ではなく、榆林河の峡谷の両
岸の崖に掘られた石窟で、大地の裂け
目のような深い谷を河底に降りてゆ
くのには驚いたが、川岸に立って理解
した。滔々と流れる榆林河の両岸には
榆の大木が涼しい木陰を作っていた。
これが石窟の名前の由来なのだ。この
石窟の本格的調査が始まったのは比
較的新しく一九八〇年、四十二窟が発
見され五千㎡に及ぶ壁画と二七〇体以
上の塑像が発見されている。次々と鍵
を開けながら懐中電灯を照らしてT
さんが流暢な日本語で案内してくれ

た。石窟はいずれも小さいが、天井まで描かれた壁画も塑像も素晴らしかった。特に唐代の優れたものが多いが、保存に努め自らはあまり残さなかったという西夏時代の貴重な壁画もあった。

それから我々は、石窟見物の間待っていてくれた車とT主任の車でバスの待機場所まで無事戻った。「奴隷に売られなくてよかった」というAさんの言いかたが、あまりに実感がこもっていたので大笑いとなった。壁画と共に中国の人たちの優しさを感じたハプニングだった。

(平成二十八年十二月十九日)